



プロフィール

2人組で夫婦のアーティスト。男性がうるまど名乗り、女性がでるびと名乗っている。1987年結成(結婚)。キャラクターを作り、そのワールドを構築し、アニメーション、イラストレーション、音楽、メディアアート、ゲーム、ネットワークサービス、ソフトウェアなど、様々な手法で表現し、発表し続けている。代表作には、「ウゴウゴルーガ」や「おしりかじり虫」、「白オバケ黒オバケシリーズ」などがある。

# アイデアを育てる「考える教育」を街に

2015年から三島市内の小学校で「らくがきワークショップ」を毎年開催している。アーティストのうるまどとでるびと。「クリエイティブワークショップ」とも呼ばれているこの試みを中心にお話を伺いました。

「ワークショップ開催に至る経緯を教えてください。」

三島にいる同級生から「2020年のオリンピックに向けて、三島でも文化の面で盛り上げていきたいが、いいアイデアはないか」という相談を受けて、話しているうちに子ども向けのワークショップを思い浮かびました。当時の沢地小学校の中村校長先生が「すぐにやりましょう」と言ってく

いっぱいに紙を敷いた落書きから始まるアイデアが出てきました。このワークショップでは、友達と一緒に作品を作ることを体験します。体育館の落書きの時点では遊びですが、そこからグループでひとつのキャラクターを選び、お話を作り、アニメにし、音もつけていく中で、自分のアイデアが選ばれるうれしさ、選ばれない悔しさを経験したり、みんなで考えることで新しいアイデアが出ることを発見したりします。そうして共に戦いながら形にする喜びを知って欲しいと思います。

だざり、地元の特種東海製紙さんから大きな紙も提供いただき、あつという間に実現しました。

最後には上映会をして、他学年の児童や父兄の投票による評価を受けます。これが大事です。優秀な作品は嬉しいし、見る人に喜んでもらうものを作ろうという意識が生まれます。



らくがきワークショップの様子

# うるまどでるびと氏

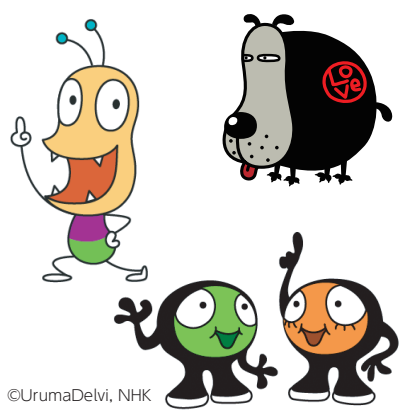
「ワークショップを通じて子どもたちに伝えたいことは何でしょう。」

このワークショップを始めて4年目になりました。最初はこれでいいの自分たちにも不安がありました。最近子どもたちの笑顔から、この活動に間違いはないという確信が変わっています。

STEAM(※)教育という、科学、数学、芸術領域に力を入れる教育方針が世界中で広がりはじめています。

私の息子が一期アメリカの学校に通っていたのですが、ある日こんな風に言いました。「日本の学校は『覚える』と言う、アメリカの学校は『考える』と言う」と。息子の通った学校は、とにかく学校という場所を、行くのが楽しい場所にしようという考えで、登校するときはダンスの時間だったりしていました。

※STEAM: [Science(科学)/Technology(技術)/Engineering(工学)/Art(芸術)/Mathematics(数学)]の頭文字を取ったもの。



©UrumaDelvi, NHK

うるまどでるび氏の生み出すキャラクターたち

## 「考える教育」で学校を楽しい場所に

まず学校を楽しい場所にする。そうすれば通ってきて、勉強は自然にするのではないかとも思うし、「考える教育」であれば、子どもたちも飽きずに続くのではないのでしょうか。子どもって大人が思っているよりずっと考える力、生み出す力があります。きっかけと少しの手助けがあれば、どんどん「考える大人」が増えるのではないのでしょうか。アニメだけでなく、習字でも俳句でも音楽でもなんでも、考える学習をもっとやったらいいと思います。

「覚える」ことも大事ですが、「考える」授業をもっと増やしていったらどうでしょう。実技はプロに任せて、先生方は「人間とはなにか」とか、もっと大切なことを教えるべきではないでしょうか。一人一人が自分で考えるように促し、子どもたちみんなに様々なことを経験するチャンスを与えて欲しいです。

### 「子どもの頃の経験で、今につながる」と感じることはありますか？

「あなたと話していると、アイデアが出てくる」とよく言われます。子どものころ、勉強は嫌いでしたが、絵だけは褒められました。小学校の時の図工の先生には「雑だけどアイデアがすごい」と言われました。通っていた絵本作家のまついのりこ先生

## 「遊び」から「作品」が生まれる体験を

私たちがうるまどでるびは、いつも2人で落書きをして、その中から生まれたキャラクターをアニメにしています。これを子どもたちにもやってもらったらどうだろうと考えました。また、いつもと違う、びつくりするようなことをしたいと思い、体育館

の絵画教室では、年に一度、銀座の画廊で教室の作品展を開くのですが、子どもたちの作品を親の前ですごく褒めてくれたんです。このことが、アートの道を選ぶことになったのだと思っています。

褒められることって、教育には本当に大事なことなのだと思います。危険なことはもちろんだめですが、それ以外なら子どもがやる変なことや理解できないことも、どんどん褒めたらよいと思います。ただし自分がやったことの責任は自分で取るということは教えた方がいいと思います。

### うるまどでるびさんの考えるクリエイティブな街とはどんな街でしょう？

## 「やりたいこと」実現のためのテクノロジー

私たちはコンテンツアーティストとして、漫画、アニメ、絵本、音楽、お絵かきアプリ開発など様々なメディアで作品発表をしてきましたが、いつでも「やりたいこと」が先にあり、それを表現するベストなメディアを選んできました。だから、いつでも、どこに行っても新人です。

これだけインターネットで世界中が繋がっているのですから、地方自治体も国を通り越して、他国と直接コミュニケーションするくらいで、ちょうどいいのかもしれない。

「三島についてどのような印象がありますか？」

水が綺麗で気候もいい、食べ物も美味しいし、富士山が好きなので、いいところだなあと気に入っています。人もおだやかですが、一方でのんびりして新しいことを起こそうとするパワーが少し足りないように感じます。

チャンスを活かす街に  
オリンピック競技場への玄関口という、天に恵まれたチャンスを逃そうとしているように見え、もったいないです。足を止めて、三島を知ってもらおう、おもてなしをしようという気持ちを持たれてはいかがでしょうか。

私たちが縁があつて三島に招いていただいて、いろいろなアイデアを出して、その中から、らくがきワークショップが実現しました。三島のみなさんが面白いアイデアをたくさん出す機会を作って、実現に向かっていく力になるといいですね。クリエイターの拠点となるスタジオが欲しいです。それができたら、東京も近いし、こちらで暮らしたいくらいです。



うるまどでるび



bit.ly/uu-dd

三島カルチャーをつくる人びと」は、三島の文化応援プロジェクトが、三島周辺に拠点を置く企業や三島の文化に関わる方々に、三島の文化についてインタビューするシリーズ企画です。配布場所／生涯学習センター、三島市民文化会館、市内文化施設等。詳しくは下記のwebサイトをご覧ください。